第4章 Q&A

DLA実施の全般に関する質問

Q1 専門家でなくても、子どもと関わる経験があればDLAを実施できますか。

A はい、大丈夫です。DLAは専門的な知識があればさらに効果的ですが、何よりも大切なのは、子どもに対する誠実さと丁寧に向き合う姿勢です。

DLAはテストではなく、子どもをよく見て理解しようとするためのツールであり、その姿勢が最も重要です。普段の教育現場で子どもたちと関わっている方であれば、子どもの気持ちに寄り添いながら進めることができると思います。完璧を目指すよりも、子どもの反応を観察しながら、柔軟に工夫して進めていくことが大切です。専門家でなくても、実践を重ねる中でスキルを磨けますので、思い切って挑戦してください。

Q2 DLAを効果的に実施するには、普段から子どもに接している教師・支援者が行うべきか、DLAに詳しい人に依頼すべきか、どちらが良いでしょうか。

A どちらでも大丈夫ですが、それぞれに良い点と気をつける点があります。

普段から子どもに接している人が実施する場合は、子どもが安心しやすく、結果を指導・支援に活かしやすいですが、距離が近すぎて、子どもが最大限の力を発揮できないこともあります。また、評価に先入観が入る場合もあるかもしれません。一方で、DLAに詳しい人は専門的に進められますが、初対面の場合、逆に子どもが緊張しすぎて、本来の力を出せない場合もあるでしょう。

どちらにしても、子どもがリラックスして安心できる雰囲気を作ることが何よりも大切です。また、子どもの気持ちに寄り添いながら進めることで、より良い結果が得られるでしょう。

Q3 私は、地域で多言語多文化の子どもを支援するNPOの一人です。かかわる子どものなかで気になる子がいるため、適切な支援の在り方を保護者に示すためにも、DLAをやってみたいと思っていますが、私が実施してもよいでしょうか。

A 長年にわたり地域の子どもたちを支えるNPOの方々の活動は、本当に大切で貴重なものです。ぜひ、DLAを実施するためのスキルを身につけ、これまでの経験と組み合わせて活動に役立てていただけたらと思います。

また、多文化多言語の子どもたちを理解し、支援するうえで、母語ができる保護者は、子どもにとって最も身近で重要な存在です。その保護者と連携しながら支援方法を考えることがとても大切です。DLAがその支援の方向性を考えるきっかけとなれば嬉しいです。

Q4 なかなか話そうとしない子にはどのように対応したらいいですか。

A まず、リラックスできる雰囲気を作ることが大切です。DLA実施者も落ち着いて接すると、子どもも安心します。

年齢が低い子どもには、アセスメントに入る前に好きなものなどの話をして距離を縮めるといいでしょう。また、子どもが考えている間は急がさず、ゆっくり待つことも大事です。少しでも話せたら、「いいですね」「教えてくれてありがとう」などとしっかり褒めて、自信を持たせましょう。優しく寄り添いながら、話したい気持ちを引き出すことがポイントです。

Q5 日本語で聞いている時に、母語で答えた場合は、どうすればいいですか。

A 来日してからの期間が短い子どもの場合、「母語で答える」子どももいます。「母語も使って話していい」という環境をつくることで、子どもが安心してアセスメントに臨むことができます。なお、日本語で話す力が十分でない子どもには、思考力を支えることばの力の発達をみるためにも、子どもの母語ができる実施者が、母語でDLAを実施するのが望ましいです。

ある程度日本語で話せたとしても、子どもが母語でも言いたいという気持ちを抱えている場合があるので、状況を確認しつつ、母語での実施を検討してください。

Q6 DLAワンポイントレッスンの動画を視聴する方法を教えてください。

A DLAワンポイントレッスンの動画は、動画に出ている子どものプライバシー保護の観点から、全体への公開はしておりません。

視聴を希望する方は、文部科学省ホームページより、視聴方法を確認してください。
URL：https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

〈はじめの一歩〉の実施に関する質問

Q7 〈はじめの一歩〉を終えるだけで1人20分～30分かかってしまいました。時間もないため、語彙チェックだけでよいでしょうか。

A DLA〈はじめの一歩〉実践ガイドの目的に示されている通り、〈はじめの一歩〉は、子どもとDLA実施者との間の信頼関係を築き、子どもがDLAに前向きに取り組める雰囲気を作ることを目的としたウォームアップです。5分程度でテンポよくさらっと終えるように心がけてください。また、〈はじめの一歩〉だけで得られる情報は限られており、それだけでは学習・指導計画に必要な情報を十分得ることは難しいです。

20分以上かかる場合は、実施方法に改善できるところがあるかもしれません。DLA〈はじめの一歩〉実践ガイドを再度確認するか、ワンポイントレッスン動画を視聴するかして、やり方を見直してみましょう。

Q8 DLAの語彙カードのなかで、「木」「葉っぱ」は正しく回答できたものの「枝」が回答できなかった子どもと出会いました。語彙カードで解答できなかったことばについての指導方法を教えてください。

A この55問の語彙は、子ども（おもに小学生）が日常生活や学校生活でよく聞くことば（高頻度語彙）と、あまり頻繁には聞かないことば（低頻度語彙）でできています。この語彙力チェックを使って、子どもが高頻度語彙も低頻度語彙もまだ習得していないのか、高頻度語彙は身についたけれど低頻度語彙が未習なのか、それともどちらも習得済みで日常会話に困らない状態なのかを知ることができます。子どもが覚えていない語彙がどれかをチェックして、それを次の授業で覚えさせるためのものではありません。

「枝」は子どもにとっての低頻度語彙です。その指導を考える場合、子どもが日常生活や学校生活の中で低頻度の語彙も自然に習得できるような豊かな環境を整えることが効果的です。たとえば、絵本の読み聞かせや日常会話の中で未習の語彙をゆっくりと繰り返し使ったり、実物やイラストを使って意味をわかりやすく示したりする工夫が役立ちます。

Q9 55問の語彙力チェックはどのくらいできたらいいのでしょうか。

A あくまでもこれまでの調査結果から得られた目安にすぎませんが、年齢相応に日本語を習得している小学１年生の日本語母語話者であれば、９割以上正解できる語彙で構成されています。また、日常生活や学校生活でよく使われる高頻度語彙を十分に習得している子どもであれば、８割程度の正答率を示すことが一般的です。

例えば、８割程度正解した子どもが小学１年生の場合、在籍学級の授業に問題なく参加できる可能性が高いです。しかし、同じ正答率の子どもが小学３年生である場合、日常会話には問題がない一方で、読み書きの力が年齢相応に達しておらず、授業参加に困難が見られることが多いです。

一方、高学年以上で来日した子どもの場合は、低年齢の子どものように自然習得に頼らなくても、学習によって日本語を覚えることが比較的容易になります。特に、母語ですでに概念を持っている語彙については、日本語でも必要に応じて先に習得することが可能です。そのため、この語彙力チェックの結果は、授業参加の可否を判断する指標として、それほど重要とはならない場合があります。

「DLA〈話す・聞く〉」の実施に関する質問

Q10 標準語ではなく、地域語で話した子どもの話す力の評価はどうなりますか。

A 話す力の評価は、地域語あるいは標準語という基準で区別して評価されるものではありません。ただほかの地域からの編入生で、母語の影響なのか、その地域語の影響なのか分からないこともあります。

その場合は、詳しい事情はあとで調べることにして、その場ではすべてを肯定的に受け止めることが大事です。

Q11 ▸▸ **実施者の日本語が理解できないのか、それは分かっているが、応答ができないのか分からないときは、どうすればいいですか。**

A 子どもが黙っていたり反応がない場合、まずは質問をゆっくり繰り返してみましょう。それでも反応がなければ、より短く、簡単な言い回しに変えてみるのもよい方法です。そうすることで、子どもが何かしら答えたり反応を示せば、質問の日本語が難しかった可能性が考えられます。また、質問を理解できており、さらに答えたいという気持ちがあるにもかかわらず、日本語で表現するのが難しい場合は、答えようとする兆候が見られることが多いでしょう。

一方で、答えたくないという理由で黙っている場合も考えられますが、子どもがリラックスして話しやすくなる雰囲気を作り、「話してみたい」と思えるようにすることで、その違いを見極める手がかりになるはずです。

〈読む〉の実施に関する質問

Q12 ▸▸ **ある程度理解していても表現力が乏しい場合、うまく自分のことばで説明できていなければ、「読書力」がない、ということになるのでしょうか。**

A 表現力を測っているわけではなく、あくまで内容が理解できているかどうかで判断します。つまり、実施者が子どもが表現したことを通して、読みの理解度を推察します。ただ母語の話す力のほうが明らかに強く、また子どもが望む場合は、母語ができる実施者が対応したり、日本語でのDLA〈読む〉を終了した段階で、母語で話す様に促してもかまいません。あとで、母語がわかる人に録音データを聞いてもらうとよいでしょう。

Q13 ▸▸ **物語の再生で、すらすら答えるのですが、読んだ内容ではなく、自分の想像で答えている場合があります。そのようなときには、どのように対処しますか。**

A 子どもが話している最中は否定せず、最後まで聞き、受け止めます。評価をする際は、自分の想像で答えた部分がテキストの内容と違っていれば、その内容を十分に理解していなかったと判断します。

指導・支援においては、予測・推測力は読解において大切な力ですので、その力を認めつつ、細部の内容にもよく注意を向けるように促すとよいでしょう。

子どもは、読んだ内容ではなく、テキストのイラストなどから自分なりに内容を想像してしまうことがよくあり、特にそれが習慣になっている子どもにはていねいな指導・支援が必要です。

Q14 ▸▸ **読むことに興味はあるようですが、漢字がネックになってすらすら読めない子どもには、どうしますか。**

A 「漢字がわからなければその場で教える」ということを、まず、しっかり子どもに伝えます。それでも選択したテキストが読み進められない場合は、テキストのレベルを下げます。

Q15 ▸▸ **すらすら読めるのですが、内容をまったくと言っていいほど理解していない場合があります。そのような場合は、どのような支援が必要でしょうか。**

A 確かに、すらすら読んでいるように見えても、実際には内容をほとんど理解していない子どもがいます。このような読み方は「字面読み」とも言えるもので、1970年代から先住民や移住者の子どもたちの課題として注目されてきました。その背景には、幼児期の言語環境が関係していることがあります。

例えば、幼児期に絵本の読み聞かせを経験した子どもは、文字の背後に面白いストーリーがあることを自然に理解しています。一方で、そのような経験がない子どもは、１年生になって文字を学び始めると、文字を順番に読むことが「読む」という行為だと認識しがちです。このような子どもたちに対しては、幼児期に戻るような感覚で、短い期間でも「(絵)本を一緒に読んで、内容について話し合う」という活動を取り入れることで、読むことの楽しさや意味を伝えることができます。